

ソグド語譯『楞伽師資記』と関連する問題について

吉 田 豊

0 はじめに¹⁾

ソグド人の佛教信仰を考える場合、ソグド本土における佛教遺跡と、ディアスポラである敦煌やトルファンでみつかるソグド語佛典がまず考えられよう。ところが前者は皆無に等しいので、実際にはソグド語佛典だけが問題になる。ちなみにソグド語佛典は、基本的にこの2地點からしか発見されていない。ソグド語佛典の奥書には譯出された場所として、敦煌以外に洛陽と長安の名前が見えているから、出土地が2地點に限られるのは偶然であり、現存する資料だけでソグド人の佛教信仰一般について議論するのは危険である。しかしそれ以外の方法も存在しないというのが實情である。

ソグド語佛典の研究状況について言えば、敦煌でみつかった佛典は主にロンドンとパリに保管されていて、すべて公開され研究も進んでいる。トルファン出土資料は、サンクトペテルブルグと京都にあるものは多くなく、大半はベルリンに保管されている。ロシアと日本の資料は公開され研究されているが、ベルリンの寫本は、全點の寫眞がインターネット上で公開されているものの、手つかずの断片は多い。そのような中、今年(2016年)ベルリンの佛教ソグド語寫本を網羅したカタログが、Ch. Reckによって公開されたことは歓迎される²⁾。これには筆者も協力し、筆者の未発表の発見も多数取り込まれている。本稿ではそのような資料のうち、最初期の禪宗文獻『楞伽師資記』のソグド語譯について報告する。そして、それに先だってソグド佛教の歴史についても略述する³⁾。

- 1) 本稿を原稿の段階で読んでくださり、貴重なコメント下さった森安孝夫大阪大學名譽教授に謝意を表す。
- 2) Ch. Reck, *Mitteliranische Handschriften, Teli 2. Berliner Turfanfragmente buddhistischen Inhalts in soghdischer Schrift*, Stuttgart 2016.
- 3) 筆者はソグド語佛典の解説をいくつか発表している：吉田 2010, 2015, Yoshida 2009, 2013, 2015。ここでの記述と重複することがあるが了承されたい。

(翻譯) 唐令復原における典據史料の檢證——『大唐開元禮』を中心に——

辻 趙
正 博 譯
晶

一九九九年、天一閣(浙江省寧波市)に明鈔本『天聖令』殘卷が所藏されていることを戴建國氏が明らかにして以来、百年來の繼續的課題であった唐令復原は、ふたたび注目を浴びる研究テーマとなった。この間、學界では、同一の文獻が唐令復原史料としていかなる價值をもつかについて異なる判断が下され、結果として異なる復原案が提示されてきた。こうした検討を通じて唐令復原研究が力強く推し進められた一方、各種文獻じたいの特徴や唐宋變革期における關係諸制度の變遷・繼承について、學界に再考を促すこととなった。本稿は、『大唐開元禮』(以下、『開元禮』と略稱)を中心に、いくつかの條文を問題として取り上げ、『天聖令』がもたらした新知見を手がかりに、『開元禮』を用いて唐令復原を行う際に注意すべき問題点について議論を試みるものである。

一 『開元禮』のテキスト

『唐令拾遺』(仁井田陞著、東方文化學院東京研究所、一九三三年)・『唐令拾遺補』(仁井田陞著・池田温編集代表、東京大學出版會、一九九七年)において『開元禮』序例を基本資料・參考資料と

して大量の唐令條文が復原されていることから、『開元禮』が唐令復原にとって重要な價值をもつことは明らかである。しかし、『開元禮』のテキストは一種のみというわけではなく、それ故ある一つのテキストのみに依據してしまうと、唐令を復原する際に問題を生じることあり得る。

學界で通常使用されるテキストは、光緒十二年(一八八六)に出された洪氏公善堂校刊本(以下、『校刊本』と略稱)を影印出版したものの(1)の外、四庫全書の文淵閣本および文津閣本(以下、それぞれ『文淵閣本』、『文津閣本』と略稱)がある(2)。現状では、各地に散在する異なるテキスト(3)を見て、『開元禮』のテキストの源流を整理し、系統的な比較校勘を行う術は無いけれども、唐令を復原する際には、入手可能な各種テキストを可能な限り集めて校勘するとともに、朱紹頤撰『大唐開元禮校勘記』(4)を参照し、テキストによる字句の誤りによって、間違った判断を下すことを避けねばならない。たとえば、校刊本『開元禮』卷二、序例、大駕鹵簿には、次玉輅(青質玉飾、駕青駟六、祭祀、納后則乘之)、……次乘黄金令一人、丞二人、騎分左右、檢校玉輅等。次金輅(赤質金

1 ソグド佛教：二つの「百年後」

ソグディアナとバクトリアのイスラム化以前の歴史と考古學が専門で、ソグド語文献についても造詣が深い F. Grenet は、2013 年 11 月に行った Collège de France の教授就任講演の英語版 "Refocusing Central Asia" で、この地域の佛教について以下のように述べている：⁴⁾

Many paradoxes are also found in the religious domain. It has traditionally been thought that Buddhism was mainly supported by the urban merchant class. This can perhaps be said of Bactria where it held an important though not hegemonic position. But in Sogdiana, the most mercantile of these societies, the exact opposite has been found: archaeological traces of Buddhism are very rare. The Chinese pilgrim Xuanzang, who passed through Samarkand in 630, noted that there were almost no more monks and that the last ones were being hunted down in their monasteries by Zoroastrian Zealots brandishing fires of purification. While Sogdian Buddhists certainly left abundant writings, these Buddhists existed virtually only in China, where they had converted.

筆者自身も前掲の諸論文で述べているところだが、ソグド人の故地には佛教は廣まらず、相当数残されているソグド語佛典は、中國にやって来たソグド人が佛教に改宗した結果であるという理解は、昨今では共通の認識である。

Grenet の講演の 100 年前、我が國の羽溪了諦は名著『西域之佛教』京都 1913、228 頁で康國、すなわちソグディアナの佛教について次のように言っていた：

かの康臣（巨）や康孟詳が支那に佛教を傳へた時代、即ち西曆第二世紀の末頃には既に此國の佛教は餘程興隆に赴いてゐたやうである。…尙此の國にも亦大月氏と同じく佛典の翻譯が行われたのであつて、ペリヨ一氏は中亞探險に於いてソグド語の重要な佛典を獲たことを報告してをられる。併し、未だ詳細な報告に接せぬから、その内容は判らない。

二 4) 次のアドレスで閲覧可能である：<http://books.openedition.org/cdf/4297>（最終閲覧 2016/8/30）。ソグディアナの佛教遺跡については影山 2003 も参照せよ。なお本稿では紙幅の関係で、セミレチエの佛教遺跡については觸れることができないが、この地域のソグド人の佛教信仰は別に論じることにした。

羽溪のこの見解は、ソグド語佛典が發表された後もながらく日本では受け入れられてきた。しかしこの説はもはや過去のものである。Grenet が指摘するように、佛教はクシャーン朝の領土であったバクトリアまでは廣まったが、鐵門を超えてソグド本國にまでは及ばなかった。

玄奘がサマルカンドに着いたのは 630 年のことであつた⁵⁾。その前年玄奘が中國を出發する時の河西は、ソグド本土と對照的である。涼州で玄奘は佛典の講義を行ったが、その様子を『慈恩傳』で次のように記している：

涼州爲河西都會。襟帶西蕃葱右諸國商侶往來無有停絕。時開講日盛。有其人皆施珍寶稽顙讚歎歸還⁶⁾。（『大正』vol. 50, 222c28-223a1）

7 世紀前半という時代背景を考えれば、ここに言う「西蕃・葱右諸國」から來る商侶の大半がソグド人であつたことは疑いない [森安 2007a, 127]。その先の瓜州で玄奘は胡僧の達摩、胡人の少年に會っている⁷⁾。後者は石槃陀という典型的なソグド語名の少年で、授戒してくれるように玄奘に依頼している。玄奘の記録に見える河西のソグド人たちは、この時代佛教に對してきわめて好意的で、ソグド人の僧侶さえいた。

それからほぼ 100 年後、開元 16 年 (728) の紀年のあるソグド語佛典が敦煌で見つかつている。その奥書部分を翻譯しよう：

酩酊を引き起こす飲み物 (= 酒) を非難する經、一卷。Sarcmik の息子である Butiyān 師の作品。紙四張。洛陽城で神のごとき天子の開元十六年であつた。龍 (戊辰) の年、第一番目の月。かくして安姓の優婆塞 Catfārātsrān が Jñānacinta 阿闍梨に歸依し心の底からお願ひし申し上げたところ、比丘の Jñānacinta は法界のすべての有情を愛する心の故に、インド語からソグドの文に翻譯した [吉田 2015, 32]。

この奥書から 8 世紀前半の洛陽にいた安姓のソグド人佛教信者 Catfārātsrān が施主になって、佛典をソグド語に翻譯してもらっていたことが分かる⁸⁾。それ

5) 玄奘の中國出發が貞觀 3 年 (629) であつたことに関しては de la Vaissière 2010 を参照せよ。

6) 後半部の英譯：“On the day of the Religious Conference, these men all came together to the place and offered jewels and precious things, as they bowed down and uttered the praises of the Master.” [Beal 1914, 12].

7) この時代の「胡」がソグドを指すことについては森安 2007 を参照せよ。

8) 唐代洛陽のソグド人佛教徒に関する史料は毛陽光 2016 が集めて論じている。そこ

を書寫した Butiyān はソグド人で、その名前の原義は「佛陀の恩恵」である。ソグド語譯を作った僧侶 Jñānacinta も、インド語の法名を名乗っているがソグド人であったに違いない。敦煌で出土するこれ以外のソグド語佛典に紀年はないものの、その大半はこの時代のものであると考えられる⁹⁾。

2 人名から見たソグド人の佛教改宗の時代

このように本土を離れ、佛教信仰が盛んな中國や東トルキスタンに移住したソグド人たちは、その土地で佛教徒になり、8世紀にはソグド語佛典が成立していた。ただし、羽溪が言及する康姓の譯經僧は2世紀から知られており、佛教に改宗するソグド人はそれ以前から存在した。既に別稿で指摘したように、いくつかのパターンがある〔吉田 2015, 34-35〕。有名な事例は康僧會 (?-280) で、彼の場合は父親が商業目的で交趾(ハノイ)に来ていたが、そこで孤児になり出家し建業に至り譯經僧になった。隋の時代の釋道仙は『續高僧傳』卷 26 に「本康居國人。以遊賈爲業。往來吳蜀。」とあり、中國で商業活動をしているうちに出家した。玄奘に五戒を授けてくれるように願った石槃陀の場合も想起される。また『宋高僧傳』には釋神會(700-794)に関して「俗姓石。本西域人也。祖父徙居。因家于岐。」とあり、祖父の代に中國に住み着いてから出家している。

それにしても、8世紀になると現在我々が目にするように、相當数のソグド語佛典が作られるようになった。背景として、7世紀から8世紀にかけてソグド人が組織的に改宗したことが考えられる。そのことは、上で見た Butiyān (pwty'n) のように、佛教信仰を反映した人名(以下、佛陀名と呼ぶ)を史料中に見てみることにしても明らかになる。ちなみに722年に死んだベンジケント王デーワシュティチュ関連の文書であるムグ文書には300名ほどの人名が残されているが、佛陀名は見当たらない¹⁰⁾。ソグド本土では佛教信仰が根付いていないことが、人

には安姓のソグド人も何人かいるから、この Sarcmik は、その内の一人の縁者であった可能性は高い。

9) ちなみに、インドから中央アジア經由で歸國する途中の727年に安西(クチャ)到達した慧超は、ソグドの人は佛教を知らず、サマルカンドには佛寺は1カ所しかないと言っている〔桑山 1998, 43, 168-169〕。康國について、「俗奉佛(『隋書』、中華書局標點本、1849頁)」、「頗有佛法(『舊唐書』、同5310頁)」、「尚浮圖法(『新唐書』、同6244頁)」のように記した記事は、中國にいたソグド人の佛教信仰に基づく誤解であろう。

四 10) 実際には、ムグ山で出土した刀の鞘の材料に再利用されていた文書に pwty'n と讀めそうな人名が見える。ソグドに佛教の信者が全くいなかったはずはないので、特に不思議ではない。なおここで問題にしているソグド語文獻に見られる人名全體に関しては、Lurje 2010 を参照せよ。

名からも確認できる。4世紀初めの古代書簡では、40名ほどの人名が残されているが佛陀名は存在しない。5世紀後半と考えられるインダス川上流の岩壁銘文には500を超える人名があるが、佛陀名は pwttδ's が1例だけである。ただこれはインド語の人名 Buddha-dāsa をソグド文字で表記したにすぎないから、ソグド人の間に佛教信仰が廣まっていた證據にはならない。

敦煌・トルファン文書で、比較的まとまった数のソグド人名を見ることが出来るものは多くない。一つはいわゆる稱價錢文書で、7世紀初め頃の高昌國のバザールでの賣買の記録であり多くの研究がある。そこでは45名ほどのソグド人の名前が回収できる〔關尾 1998, 82〕。そのうち康顯願以外はソグド語の人名を漢字で音寫したものだが、佛陀名は1例もない。639年のソグド語の契約文書には、女奴隷を賣ったソグド人や證人、書記とそれらの父親の名前が14名分あるが、そこにも佛陀名はない〔Yoshida *apud* Hansen 2003〕。

一方敦煌文書には、750年頃のものとしてされるソグド人が集住する從化郷の差科簿がある。回収される230人の人名のうち、107名が漢字で音寫されたソグド語の人名を帯びている。そのうち13名は佛陀名である。内譯は Butiyān が4名：曹伏帝延、安伏帝延、羅伏帝延、安伏帝延、Butifarn(原義)佛陀の榮光が5名：康伏帝忿、康伏帝番、康伏吐忿、何伏帝忿、石勃帝忿、*Buttakk(Butiを含む人名から派生したニックネーム)が4名：康伏特、康伏德(2名)、康伏多である〔吉田 2015, 35-36〕。敦煌出土のソグド語佛典 P[elliot sogdien] 8には長い奥書が添えられており、施主である康(x'n)姓の Curakk(cwr'kk)の縁者45名分の名前が回収できる。その中の佛陀名は2例で、pwtyδ'yh(原義)佛陀の女奴隷と pwty'n である〔吉田 2015, 36-37〕。参考のために奥書の冒頭部(166-168行)を見てみよう：

年は〔空白〕中國(βγp'wr-stn「原義：天子の國」)の敦煌で虎の年6月15日。かくして康姓で Nāftir の息子の Curakk が信心と信仰から淨い心で、この經典を翻譯するように命じた……

「中國の敦煌」と明言しているにも拘わらず、年號を書くことができないのは、河西に吐蕃が侵入して敦煌に中原の年號が傳わらなかったことと関連するのであろう。8世紀後半の佛典であると考えられる。

このように7世紀前半までは、佛陀名が見えず、8世紀以降にはそれが見られることは、ソグド人の佛教信者が増加し社會現象化したことと関連するだろう。そしてそのことがソグド語佛典の成立の背景にあったであろう¹¹⁾。それでは7世

11) 吉田 2015, 35-37 でも論じたように、唐の領土に住むソグド人は唐の社會の一部

紀後半から8世紀前半にかけてはどうであろうか。この時期にまとまった数のソグド人名を残す文書は知られていないが、トルファン出土文書を検索すると、665年の文書に在證される史浮伽潘(*b'ju tie p'uán)¹²⁾のような、浮伽ないし浮知を含む人名を見つけることができる。これは佛陀を意味するソグド語 Buti (pwty)の音寫形に相違なく、問題の人名は Butifarn に復元できる。管見に入っものをリストすると以下の通りである。ちなみにこれらは皆ソグド人が帯びるいわゆる昭武姓の名前である：¹³⁾

人名	出典	文書の年代	想定される原語 ¹⁴⁾
目浮伽盆	吐魯番 6/47	645～	*pwty/βntk
翟浮知□	吐魯番 6/465	665	*pwty []
史浮伽潘	吐魯番 6/494	665	*pwtyfrn
何浮知	大谷 1/11	691	*pwty
何浮伽毘	大谷 1/88	691	*pwty/βyrt
曹浮伽盆	吐魯番 7/216	696	*pwty/βntk
安浮伽臺	吐魯番 7/469	707	*pwtyδ'yh
石浮伽盆	吐魯番 7/473	707	*pwty/βntk
石浮伽滿	吐魯番 7/474	707	*pwty m'n
安浮伽盆	吐魯番 8/23	713	*pwty/βntk
康浮伽延	吐魯番 8/25	713	*pwty'n
康浮伽蒲	大谷 1/136	741	*pwty-?
安浮伽延	大谷 2/234	?	*pwty'n

になっていたものであり、佛典の翻譯や書寫に獨自の國家によるサポートを受けていなかった。一般にソグド語佛典も含めて胡語佛典と呼ぶが、ウイグル語、コータン語、トカラ語佛典はオアシス國家の國王も信仰する宗教の聖典であったのと對照的である。

12) 本稿では中古漢語の再構形を B. Karlgren, *Grammata Serica Recensa*, Stockholm 1957 から引用する。

13) 敦煌文書その他に見られる佛陀名も含めて、吉田 1998, 40-41 を参照せよ。リスト中の「吐魯番」は、『吐魯番出土文書』1-10、北京、1981-91 を、「大谷」は『大谷文書集成』1-2、京都 1984-90 を示す。なお最初の2名は吉田 1998 發表後に気がついた。翟姓がソグド人の姓であることは、最近になって指摘されるようになった[羅・榮 2016, 293-299]。ただし彼らが、翟姓の出身地を玄奘の言う伐地に比定しようとするのは當たらないと思う。目姓は珍しいが、昭武姓の穆と同じ發音であり、そのヴァリエントであったようだ、cf. Wang Ding, in: *Manuscript cultures, Newsletter*, No. 1, 2008, 26, n. 10。

14) 盆(*b'uán)に對應する原語の比定は難しい。βntk「奴隸」はあくまでも假説である。Wang Ding (前註参照)は prn「榮光」を想定するが、それは難しい。浮伽蒲(*b'uo)は女性の名前だが、原語を推定することが出来ない。

わずかに残された文書をもとにあまり大膽な推定をすることは許されないが、7世紀後半以降の文書に佛陀名が確認される¹⁵⁾。中國在住のソグド人が佛陀名で命名されたのは、玄奘が河西での彼らの親佛教の氣運を伝える7世紀前半以降と考えられよう。P8の奥書に現れる人々は佛教徒であったと考えられるものの、佛陀名を持つ者は45名中わずかに2名であった。佛教徒であるからと言って佛陀名を名乗るわけではないから、こうして佛陀名が見つかることは、トルファンのソグド人に佛教信者が一定数いたことを示すと見なして良いであろう¹⁶⁾。

3 ソグド人の佛教信仰と禪宗文獻

ここであらためて、ソグド語佛典が出土する中國とトルファンにおけるソグド人の佛教徒について考えてみよう。ソグド人佛教徒には一般信者と出家者がいた。一般信者は佛典の翻譯や寫經のスポンサーになっていた。石祿山が書寫した敦煌出土の佛名經の奥書からも知られる通り [cf. Yoshida 2009, 290-291]、彼らは漢文の佛典も書寫していた。トルファン出土の康居士の功德記碑文も武周期の寫經活動を知る上で興味深い [榮 2001, 204-221]。また『慈恩傳』の記事からも分かるように、佛寺や佛僧への寄進・布施も行っていった。龍門の造佛銘に「南市香行社社人等造像記」があり、洛陽の香行に屬するソグド人の名前が見えることも有名である [中田 2014, 47-48、毛 2016, 316-317]¹⁷⁾。ソグド人の僧侶は中國で出家する場合、中國僧に混じって活動していた。従って彼らは主に漢文佛典を讀んでいた。そのことを直接的に示す佛典が知られている。一つは、漢文佛典の漢字の發音をソグド文字で表記した文獻である¹⁸⁾。もう一つは漢文阿含經典の裏面に、その經典のタイトルをソグド語に翻譯して書いている事例である [Yoshida 2009, 326]。ソグド語譯した漢文佛典にある梵語の音寫語は、漢語ではなく原語の發音をほぼ正しく表記しているから、梵語佛典についても一定の知識を有していたようだ。プラーフミー文字表記の陀羅尼をソグド文字で音寫した文

15) 讀みに議論のある高昌國の延壽7年(630)の墓誌の康浮面(或いは圖)に関して、筆者は浮面と讀んでソグド語の人名要素 *βy'mn の音寫と考える。荒川 2010, 55, n. 33 は「浮圖」と讀む。

16) 毛陽光 2016 によれば洛陽出土のソグド人墓誌 51 點中、被葬者が佛教徒であると特定できるのは 15 點あるという。死亡年の最も古いものは顯慶2年(657)であるから、ここでの推定と矛盾しない。

17) 恒州開元寺三門樓石柱および房山の石經に見えるソグド人の寄進者については森部 2010, 39-56 参照。敦煌の事例については赤木 2014 を参照せよ。

18) 吉田 1994, Yoshida 2013 参照。ちなみにそこに見られる漢字音は、敦煌出土のチベット文字表記の漢字音よりも古く、8世紀前半を想定させる。

獻も知られているし [Yoshida 2015, 172, no. 24]、上で引用した P 8 には梵語の Udānavarga からの引用があるが、やはり梵語の偈をソグド文字で音寫している [Yoshida 2015, 175-176, no. 53]。トルファンおよびクチャや焉耆にいたソグド人僧侶は別にトカラ語も知っていた。トカラ語 B から翻譯したという奥書を持つ佛典が知られている [Yoshida 2015, 175, no. 45]。

翻譯の絶対年代は上の 1 例以外判らないが、玄奘や義淨が漢譯した佛典のソグド語譯があることなどから、早くて 7 世紀後半であり多くは 8 世紀に作られているようだ。敦煌出土の佛典の多くは質の良い紙に書かれ、一紙の大きさもそのような年代推定と合致している¹⁹⁾。ただし 10 世紀の寫本も確かに存在する。P 16 はそれで、ソグド文字としては遅い時期の草書體で書かれ、同じ書體で書かれたウイグル語の 1 行が最後に添えられている [Yoshida 2015, 175, no. 51]。ウイグル語が添えられるのは 10 世紀敦煌と、西ウイグル國との交流を反映するものであり、その時代にバイリンガルのソグド人が書いたものである。

ソグド語佛典はソグド人のために作られたものであり、それを見ることによって彼らの信仰した佛教についてある程度推測することができる。現在まで内容の比定ができてくるものは多種多様だが、多くは、『涅槃經』、『金剛般若經』、『維摩經』、『藥師經』のような大乘佛教の經典である²⁰⁾。また中國で作られた偽經の翻譯もある。有名なものは『善惡因果經』である。下でも論じるように禪宗文獻とされる『法王經』や『佛爲心王菩薩說頭陀經』が見つかることも特徴の一つである。おおむね原文に即した翻譯である。ただ『ヴェッサンタラジャータカ』のような説話そのものや、『僧伽吒經』のような説話を含むテキストでは非常に自由な翻譯になっており、未だに直接の原典が何であるかについて定説がない [Yoshida 2015, 170-171, nos. 3, 12]。わずかながら律 (廣律と戒本) の譯も見ついていることも注目される [Yoshida 2015, 173, nos. 28, 29]。總じて翻譯文獻であり、佛教學の研究對象として独自の価値を持つわけではない。何よりも、残された資料の大半が斷片であって、ソグド語を専門にする者でもなければなかなか扱えない。ただ従来認識されていないが、ソグド人佛教徒は少なくとも一つの點で文化的に重要な役割を果たしていることは指摘しておきたい。最近筆者が明らかにしたように、5 世紀後半頃からソグド文字は縦書きになった [Yoshida 2013a]。そのソグド文字で表記された佛典の形式は 3 種類ある。一つは中國式の卷子本、もう一つはインド式の貝葉の形式であるが、これには 2 種類あって貝葉

19) 下でも言及するソグド語譯の『心王經』について、禪宗文獻の専門家である伊吹敦は、想定される原典のテキストから、8 世紀前半と推定していることも参考になるだろう [伊吹 2003, p. 187]。

20) ソグド語佛典全體については Yoshida 2015 参照。かなりの佛典が知られているにもかかわらず、『法華經』のソグド語譯が見つからないのは非常に不思議である。

型の細長い紙の長い邊に沿って書く長行貝葉と、短い邊に沿って書く短行貝葉がある。左から右に横書きするブラーフミー文字の貝葉本には長行貝葉しかなく、これが本来の書き方であったはずであるが、ソグド人たちは短い邊に沿って書く方式を考案した。敦煌で出土する大型の紙を使った貝葉本、P 1、P 2、P 3 は短行貝葉である。トルファン出土佛典でも、Kāñcanasāra 王物語も大型の紙に書かれた短行貝葉である [Sundermann 2006]。一方本論文で発表する寫本は長行貝葉である。一般に小さめの料紙を使う場合は長行貝葉になるようだ。ソグド文字がウイグル文字にさらにモンゴル文字へと繼承されていく過程で、短行貝葉の形式も受け継がれていったことは注目されて良い。

3-1 ソグド語の禪宗文獻

ソグド語佛典に禪宗文獻が存在することを初めて指摘したのは吉田 1984 で、敦煌出土の P 9 に、『究竟大悲經』からの引用があることを発見し、それが禪宗文獻にしばしば引用されることが判明したときであった。引用部分のテキストと翻譯・譯注を発表するとともに、原典が発見されていない P 16 や、一般に Dhūta-sūtra と呼び習わされていたスタイン將來の敦煌文獻も、禪宗文獻である可能性が高いことを指摘しておいた。なおこの佛典には心王菩薩が登場し、P. Demiéville *apud* Benveniste 1933, 113-115 は『大正』85 卷 (no. 2886) に収録された敦煌寫本の『佛爲心王菩薩說頭陀經』(以下『心王經』)の失われた部分に對應するものだろうと考えていたが、後にそれが正しかったことが確認された。筆者は 1985 年、大谷探檢隊將來のトルファン文書のなかに『法王經』のソグド語譯斷片を発見した。これもまた禪宗文獻にしばしば引用される偽經である²¹⁾。1994 年にはベルリンのトルファン出土文獻に、楷書體のソグド文字で音寫された『金剛五禮文』があることを発見し発表した。この文獻は 10 世紀の敦煌で流行していたもので、禪宗文獻に分類されている [吉田 1994, 367-358]。同じ頃、禪宗の研究者である伊吹敦は、Dhūta-sūtra の MacKenzie 1976, 33-51 による英譯をもとに、禪宗文獻に引用された『心王經』の佚文に對應箇所があることを発見した。そして英譯をもとにもとの漢文原典の復元を試みた。それと相前後して、中國では『心王經』の全文を残す寫本が方廣錫によって発表された。筆者は新たに発表された漢文原典とソグド語の Dhūta-sūtra を比較して、そこに含まれる従来意味不明であったソグド語の單語や表現の意味を明らかにする論文を発表した²²⁾。

21) さらに敦煌出土の P 23 も『法王經』の譯であることが判った [Yoshida 2009, 316]。

筆者が把握している限りでは、柳田聖山 1999, 687-692 と榮新江 2003 がソグド語佛典に禪宗文獻が含まれていることの意義について論じているが、それ以外では残念ながら関連する研究者から注目されることはなかった。漢文を直譯した文體や語句が餘りに難解で部分譯しか發表されていない P 16 が、何らかの語録のソグド語譯であると推定される以外は、いわゆる偽經の翻譯であって、禪宗文獻に頻繁に引用されているものの、禪宗文獻そのものではないという点も背景としてあると考えられる²³⁾。今回正真正銘の禪宗文獻である『楞伽師資記』のソグド語譯が発見されたことにより、改めて中國にいたソグド人の佛教信仰、とりわけ禪宗の受容について考える機会になる。またこれは『楞伽師資記』が、トルファンで発見された最初の例であることも強調しておきたい。残念ながら、わずかな断片が残されているだけで、テキストの異同等は論じられないし、何よりも禪宗について知識を持たない筆者には、ソグド語の禪宗文獻が、ソグド語佛典全體の中でどのように位置づけられるのかについて論じることができない。今は、関連する事實を提示して今後の研究の材料とするだけである。上山大峻がこの同じ佛典のチベット語譯を発見し²⁴⁾、チベット語の禪宗文獻が注目されるようになったように、ソグド語の佛典にも関心が集まることを願う。

4 テキストの校訂と翻譯および譯注

筆者が『楞伽師資記』に比定したソグド語断片のテキストと翻譯、譯注を提示する。扱うのは、現在ベルリンのトルファン學研究所に保管されている長行貝葉の断片 3 点である。それらの所藏番號とサイズを記す：

- (1) So 10100o [T I α] (=Reck, No. 468): 20,4 cm x 7,0 cm
- (2) So 10311 [T I α] (=Reck, No. 556): 4,6 cm x 5,3 cm
- (3) So 10650 (25) [T I D / 10a] (=Reck, No. 556): 20,0 cm x 6,9 cm

ただし、Reck の番號から知られるように (2) と (3) は接合するのであって、接合後のサイズは、22,8 cm x 6,7 cm だという。接合された状態では行の両端が残っており、長い邊は本來 23 cm 程度であったことがわかる。寫真から確認で

22) 伊吹の一連の研究は伊吹 2003 に言及されている。方廣錫の研究書は『藏外佛教文獻第一輯』北京 1995 である。また柳田 1999, 682-717 でもこの佛典の思想について論じられている。筆者の研究は Yoshida 1996 である。Yoshida 2009, 313-317 ではソグド語の禪宗文獻について、テキストの翻譯を引用しながら解説した。

23) これらの偽經が禪宗文獻そのものではないという点は、伊吹 2005 が特に注意を喚起している。

24) 上山大峻「チベット譯『楞伽師資記』について」龍谷大學佛教學會編『佛教文獻の研究』京都 1968, 191-209。

きるように、短い邊もほぼ残されており、幅は 7 cm 強だったと考えられる。貝葉の絲通し穴と穴の周りの空白部(直徑 1.9 cm)も残っている。片面に 7 行ずつ書かれている。料紙のサイズも同じで、楷書體に近い草書體で書かれた書體も類似した 2 つの寫本であるが、両者は微妙に異なり、筆者が内容を比定するまで Reck は異なる寫本として扱っていた。(1) は下部に界線がみえ、罫線も一部で残っているが²⁵⁾、(2) + (3) にはないという。句讀點も、(1) は 4 點式だが、(2) + (3) では短い線を二つ書くタイプである。(1) はまた表面に白いコーティングがしてあり、所々でそれが剝げて文字が失われてしまっているが、(2) + (3) にはそのようなコーティングが見えず、文字は比較的良く残っている。(1) の文字は (2) + (3) に比べて繊細な線で書かれている。このように、この 2 葉が本來 2 つの別の文書に属していた可能性は完全に排除できない。しかしながら、2 つは原典の相當離れた部分に對應するので、一つの文書のなかに見られる書體や料紙のヴァリエーションとみなすことも許されよう。古い整理番號から、ドイツの第 1 次トルファン探検隊が高昌故城の遺跡 α で入手したものであることが判る。原典である『楞伽師資記』は 8 世紀初めに成立しているので [柳田 1971, 28-30]、それがこの寫本の年代の上限である。書體などから 8 世紀後半から 9 世紀前半の寫本と推定しておくが、さして強い根據があるわけではない。

4-1 テキスト A : So 10650 (25) + So 10311

ほぼ完全に残った 1 葉である。下線部は So 10311 に残された部分。[角括弧] は破損した文字を、(丸括弧) は文字の殘畫が残っていることを示す。=== は絲を通す穴の周りの空白部で、句讀點は oo で示してある。破損部だけでなく、紙が残っている部分でも寫本の表面は相當傷んでいて、文字が判讀できない。ここでは原典を参照しながら、破損部を復元している。それらはいくまでも筆者の推定に過ぎないので、[] に入っている部分だけでなく、一部文字が見えている場合でも注意を要する。

recto

- 1 [y](w)r (c'wn) '[nβ'n](t) pc'(x)šy pyδ'r z'(t) mw[rδ](w p)[rwy]δ^a nβ'(nt)
- 2 pc'xšy p(C)[zn?]w(y)[c]'rt wyt'p'k xyδ w'nw wynt m'ny kwtr
- 3 "stny mr(t)[==]s'r 'ws'wyt'k zp'rt 'xw rty 'kw "stny zp'r[t]

25) Web 上で公開されている寫真で界線はかろうじて確認できるが、罫線は確認できない : <http://turfan.bbaw.de/dta/so/images/sol0100o-seitel.jpg>。その他の断片もこの同じ Digitales Turfan Archiv のサイトで見る事ができる。

4 wy"kyh === "mtyc 'yδcw m'n nyst oo rty 'kw wyrmny wy[k]
 5 (m)yδny [']stny wyc ZY ptβr'w L' wm't oo rty 'kw wyc wy"(k)
 6 [r'm'[n](t)^b wyrmny 'xw 'YK' wyrmny βwt xyδ nyδcw prw'yδ cxšt(k?) []^c
 7 []ptβr'[w] wy" k r'm'nt kr'n 'xw kr'n xyδ['pw]

verso

1 [](p)[w]rnk (x)wynty oo [](p)w rnk xyδ zp'rt 'xw oo^d pw pδ'wβsy
 2 [x](y)δ(w)[](k)'ynk' 'xw oo ZY rnk xyδ "zy myry xypδ 'nβ'nt xwynty oo
 3 (r)ty z(p)[](r)t xyδ 'myn pwδ'y xypδ βr'w xwynty oo kδ' (s)'t(h)
 4 w'β'y nx [](y) === nšk'rt xyδ prβtm w'r'k 'rδ'r 'xw oo 'kw r'δh
 5 pr"ytk (w) [](x) (š) ptrmtk 'xw (oo) p'rwt y w'xš xyδ 'kw r'δh s'(r)
 6 L' 'ns'(k) [y xw] (yn) [t] (y) oo (s) tyw kwtr w'r'k wxsty (w) r'mtk' m'(šk)
 7 [k](w)tr "(s)t(n) [y wxst] (y) m'šk kwtr nyst cw (w) r'y [] (...) []

a. 紙の表面がこすれて、δ'以外の文字はほとんど讀めない。實際 Reck はこの部分の文字を讀んでいないが、最後は (kδ') と讀む。b. Reck は筆者の提案した讀みを受け入れず、[]'m(t)[y](c) と讀むが、筆者の讀みは原典によって支持される。c. 語末の文字kの長い尾が巻き上がって、前の行の wy" kのすぐそばに見えている。d. 書き忘れた句讀点を、後から 'xw と pw の間の狭いスペースに書き入れたようで、奇妙な形になっている。e. (k) は (p) も可能。f. Reck は nyr'mtk と讀む。冒頭は文字がぼやけていて判讀が難しいが、' (alif) で始まっていることは確かなように見える。

「唯、因縁を受容する故に、生死を探し求めれば、それはまさに因縁を受容する心を明瞭に照らすことである。そのように見て、心の性は (3) もとから清淨である。もともと清らかな場所では、眞實の心は何ら存在しない。静寂な場所の (5) 中には本來、動と念はなかった。動の場所は常に静寂である。静寂になるときすなわち、何ら探し求めることを欲し [ない (?)]。念の場所は常に眞である。眞は即ち [付着することがない、] (verso 1) 染がないと呼ばれる。染がないことはすなわち淨い。付着がないことはすなわち、[脱] (?) である。そして染はすなわち生死の因と呼ばれる。(3) 淨いとはすなわち菩提の果實と呼ばれる。もしすべてを言えば (?), 深い義は究極的に空なる境界である。道に (5) 到達して、[言葉] は静まっている。なぜなら言葉はすなわち道に對して適切ではないと [呼ばれる] からだ。性は空であると言われ、静まった實體の性は本來的 [だと言われ (?)] ても、實體の性はない。もし空なる…」

この部分は、『楞伽師資記』の作者である淨覺の自序にあたる部分である。ソグド語譯に對應するのは、『大正』vol. 85, 1283b14-18 だが、『大正』が底本とした S. 2054 には脱落があり、『大正』が甲本とする P. 3436 によって補う必要がある。幸い柳田が校訂したテキスト、讀み下し、和譯と注釋があるので、それを利

用する²⁶⁾。

後還退敗也。覆尋生死、只爲攀緣。返照攀緣之心、心性本來清淨、清淨之處、實不有心、寂滅之中、本無動念、動處常寂、寂即無求、念處常眞、眞無染著、無染是淨、無繫是脫、染即生死之因、淨即菩提之果、大分深義究竟是空。至道無言、言則乖至、雖以性空擬本、無本可稱、空自無言、非心行處。(…後に還って退敗するなり。生死を覆尋するに、只だ攀緣の爲めなり。攀緣の心を返照するに、心性は本來清淨にして、清淨の處には、實に心有らず。寂滅の中には、本より動念なし。動處は常に寂にして、寂は即ち求むる無く、念處は常に眞にして、眞は染著無し。無染は是れ淨、無繫は是れ脱なり。染は即ち生死の因、淨は則ち菩提の果なるのみ。大分の深義は、究竟じて是れ空にして、至道は無言、言えば則ち乖至る。性空を以て本に擬すと雖も、本として稱す可き無し。空は自から無言にして、心の行處に非ず。…)

4-2 テキスト B: So 10100o

ほぼ完全な貝葉だが、寫本の上部(横書きと見れば、右端)が数センチ分破損して失われている。

recto

1 [δβtyw 'nβ'nty](nw)'rty [š](w)'m(k w)xst(y) [(nš)k'(r)t (h)^a
 2 [](p)[w](t)δ'rt p(w)'zw xn[t] (wy)s(pw) c'(w)n 'krtyh
 3 [nβ'nty pyδ'r?]==== p(r)[w'r]t'n(t) 'βyzy δ'wn wγšy (m)γwn pcy'z'y h
 4 [wyspw s](t) ===== c'(wn) 'nβ'nty "z'yt (r) [ty] (kδ' šy"tr p)twry
 5 [γwβ pcy]wβ ZY wr' "m'rδ'n w'xš w(') [βr 'w] (št yw) [n] (k?)^b []
 6 [] (') c'wn xrtk δwkyk 'nβ'nt (z'wr 'kδry βyrt δ'r'm?)^c h
 7 [rty kδ' ZK] ('nβ'nt ny'mst pr) [ywy] (δ) [m]s (š) [y] (tr?) [] t (p) []

verso

1 [](s)t^d pr'ymyδ 'sk'tr [] ty [] (p) [] xw] (s'ntyh?)
 2 [pr'ymn] (t) 'sty p'tsrδ p(n)'s'k pcp'n ('t?) [βyr'mnty] 'nβ'nt nw[r]t[y]

26) テキスト: 柳田 2000, 625-637; 讀み下しと翻譯: 柳田 1971, 67-82。句讀點は柳田 2000 に依ったので、讀み下しと一致しない部分がある。この部分に對應する寫本は 3 本 (S. 2054, P. 3294, P. 3436) あるが、P. 3294 は「只爲」の部分で寫本は断裂している。柳田はおおむね P. 3436 の讀みに従うが、寫本の「无」は「無」に改めている。「至道無言」は P. 3294 では「至道亡言」とある。なお「本無動念」の「動」は寫本ではほとんど破損しているが、『大正』および柳田はそのように補っている。それが正しいことはソグド語譯からも確認できる。

- 3 [xw? ZK](m)'n L' (kyš)t L' βz"yt° ('s)k'(tr wγšy) xws'nty' [w](') [t]
 4 [n'yδcw?](L) ===== wyšt wnty xyδ xwty pyšm r'δh nw'rt'y (')wšt
 5 [cyw'yδ 'nβ'nt] ===== nw'rt'y šw'm'k xwynty oof cš(ty) pw prw'yδ'k
 6 [pw cxšt'w](k) [wxst](y) p'rZY (δ)[wk](c)ykt mrtxm'y't r'm'nt symh
 7 [wšt'nt? ZY wy](k)[y wy'ky?]pδ(wβsy) 'nx'yzt (x)yδ (c)xšt'w'k
 a. この行末の h は埋め草である。この寫本には別に表面の第3行、第6行にも見えている。b. (yw) の読みは確實ではない。c. z'wr 以降の語の読みはほとんど推測であるが、殘畫はこの読みと矛盾しない。d. s と讀んだ文字は、殘畫からは s とも讀める。e. 本来は文字 z の下に補助記號があったのであろう。f. 4 點で構成された句讀點である。[「第二は、因縁」]に従って行くことと言われる。その義 [...] 衆生は無我であり、すべては行爲の [「因縁によって」] 轉じる。苦しみを喜びとともに等しく受け取ることは、(4) [すべて皆]、因縁から生まれる。もしもすばらしい報い、[賞賛] と利益などの諸々の事がそれほどあっても、[これは? …] 過去の因縁の力で私が今手に入れたのだ。(7) [もしも] 因縁が盡きてしまえば、[それによってまたすばらしい…。] (verso 1) これによってもはや […どんな喜びがこのことに] あるだろうか。それから、失うことが迫ってきていること及び [得ることは] 因縁に従っているのである。心は減りもせず増えもしない。もはや喜びや幸せの風は (4) [決して?] 亂す (?) ことができない。それはまさに自ら道に従って存在する。[それで因縁に] 従って行くことと言われるのである。第三は、探し求めることがないこと [欲することがないこと] と言われる。なぜなら、世界の人間たちはいつも心が混亂した状態 (7) [にあり、至る所に] 執着 (の心) を起こす、それはすなわち欲すること [と呼ばれる。]

柳田のテキストと読み下しを引用する。この部分にはチベット語譯もある。沖本による和譯も添えておいた²⁷⁾。

第二隨緣行者、衆生無我、並緣業所轉、苦樂齊受、皆從緣生。若得勝報榮譽等事、是我過去宿因所感、今方得之、緣盡還無、何喜之有。得失從緣、心無増減、喜風不動、冥順於道。是故說言隨緣行。第三無所求行者、世人長迷、處處貪著、名之爲求。智者悟眞、… (第二に隨緣行とは、衆生は無我にして、並びに緣業の轉ずる所なれば、苦樂齊しく受くること、皆な緣より生ず。若し勝報、榮譽等の事を得るも、是れ我が過去の宿因の感ずる所にして、今は方に之を得たるのみ、緣盡くれば

27) テキスト、読み下し、翻譯：柳田 1971, 132-140; 沖本 1978, 81。句讀點は柳田 1971 に依る。沖本 1978, 86 では漢文のテキストの校勘もしているが、特筆すべきヴァリアントはない。

ば還た無なり、何の喜びか之れ有らん。得失は緣に従って、心に増減無く、喜風にも動ぜず、冥に道に順う。是の故に説いて隨緣行と言うなり。第三に無所求行とは、世の人は長に迷うて、處處に貪著するを、之を名づけて求と爲す。智者は眞を悟り…)
 〈チベット語譯〉「二、即ち緣に従って行ずることというのは、有情に我がないならば、すべて緣によって變化する、即ち樂苦も業の因から生ずるのである。賞賛と繁榮という報いを得ても、それは前世の因によるのであって、それを今得ているのである。功德が盡きると再びなくなるのであればどうして喜ぶことがあるか。得失も功德の上に残るのであって、心に消滅は無い。喜びの風が動かぬならば心と法道は一致するのである。それ故に緣に従って行ずることと説くのである。三、即ち何も求めることがない行というのは、世間の人は絶えず損なわれて、彼は心が五欲に貪著する故に、求めるものと名付けるのである。賢人は正しい理を了達することによって、…」

4-3 譯注

漢文原典とソグド語譯を比べてみると、細部で異なっているものの、基本的には原文を忠實に翻譯しようとしているように見える²⁸⁾。チベット語譯は孤本で、淨覺の序文に對應する部分は存在しない。本来存在しなかったようなので、序文も譯しているソグド語版は、チベット語譯からの重譯ではあり得ない。そのことは、對應箇所がある本文部分で両者を比較することによっても確認される。

下記の譯注では、本文書で初めて現れる語や、從來知られている意味とは異なる用法を取り上げている。

テキスト A

recto 1, 2: 'nβ'nt pc'xšy 「因縁を受け入れること」。これは「攀緣」にあたる。動詞 pc'xš²⁹⁾ は pc'y'z 「受け取る」と同義と考えられてきた。しかし本文書では別に pc'y'z が用いられ「受」を翻譯している。二つの動詞が使われる文脈を調べて見ると、pc'xš- は「受容する」の方向の意味であり、「(手にとって) 受け取る」を意味する pc'y'z と微妙に意味が異なっていたようだ。δyn ptcxš- 「宗教を受け入れる、改宗する」はその典型的な用例である。柳田が「対象によりかかる心」と譯する「攀緣」の「攀」の意味を、ソグド語の譯者は正しく理解していなかったようだ。

recto 1: (p) [rwy]δ' 「探し求めれば」。読みは確實ではないが、この復元は原

28) 言い譯がましいが、禪宗文獻はきわめて難解でそのソグド語譯も多くの場合意味不明であり、必ずしも筆者の譯が悪いわけではない。

29) 通常は ptcxš- と表記される。pc'y'z の過去語幹は pc'yšt- になるので、ソグド人自身も 2 つの動詞を混同していた可能性がある [Sims-Williams 1985, 54]。

文の「覆尋」に合う。形式的には2/3人稱單數の接續法になっている。なお、ソグド語譯は原文の「覆尋生死」と「只爲攀緣」の順序を変えているが、その理由には分からない。ソグド語譯の原典が異なっていたのかもしれない。

recto 2: w'nw wynt 「そのように見る (3 sg.)」。原文には對應する語句が見当たらない。

recto 2: kwtr 「性」。ソグド語の kwtr は梵語の gotra からの借用語で「種族、一族」を意味する。既に筆者が指摘したように、禪宗文獻ではなぜか一貫して漢文の「性」の翻譯に用いられている [吉田 1984, 82]。

recto 6: cxšt(k) [] 「(形容詞) 欲しい、望んでいる」。テキスト B verso 7 の (c)xšt'w'k も参考になる。これは原文の「求」に對應する。cxšty 「欲しい」という aka 語幹の形容詞は知られている [DMSB, 67b]。

verso 1, 2: 'pw rnk 「無染」、rnk 「染」。これから派生した形容詞 rnk'n 「色のついた」が知られているが、單獨形が現れるのは初めてである。rnk は中世ペルシア語の rang 同様、「色」を意味する語であろう。ここでは「染まること」の意味で用いられていると考えられる。興味深いのは、同じく「無染」の譯語として Dhūta-sūtra に 'pw rxm'k があることで、接尾辭 -m'k を伴う rx- と rnk は同じ語根 *rang に由来するのであろう [Yoshida 1996, 171]。

verso 2: (w) [](k)'ynk。これは「脱」に對應するが適切な語を復元できない。
verso 3-4: kδ' (s)'th w'β'y 「もしすべてを言えば」。原典の「大分」に對應するが、原文の眞意を理解できていないのであろう。柳田は「大分」を「根源的な存在」と譯している。ただ s'th の読みは必ずしも確實ではない。

verso 4: 'rδ'r は「界」の譯語として使われるが、ここでは原文に界はないので、この語を補って譯していることになる。

verso 6: [xw](yn)[t](y) 「呼ばれる」。復元形は全くの推定である。破損部からは比較的長い語で、文脈からは繫辭にちかい意味を持つ語が期待される。

verso 6, 7: m'sk kwtr 「實體の性」。原文との對應は今ひとつ明らかではない。Dhūta-sūtra には m'sk が何度か現れるが、對應する漢語も一定しない [Yoshida 1996, 170, 172, n. 34]。ソグド語の m'sk の語源および本来の意味である、「資本、もとで」については Sims-Williams 2007, 229 参照。

テキスト B

recto 5: [γwβ pcγ]wβ 「褒め稱えること、賞賛」。原文の「榮譽」に当たると考え復元したが確信はない。この文獻では動詞の現在語幹を動名詞として用いる例が見られる、cf. wyc, ptβr'w, prw'yδ, "zy, myry。γwβ と pcγwβ の組み合わせについては、Bāzāklik Letter A, 17: γwβt'kw pcγwβt'kw を参照せよ [吉田 2000, 38]。

recto 6: w'xš 「事」。w'xš は本来「ことば、語」を意味するが、「ことがら」

の意味でも用いられる [DMSB, 199a]。

recto 7 - verso 1。破損部が多くて、全體の文脈が取れない。またこの2行で、原文のわずか4文字「緣盡還無」に對應しているように見えるのも奇妙である。もしかしたらソグド語譯の原典は、我々が目にしている漢文と少し違っていたのかもしれない。

verso 2: p(n)'s'k pcp'n 「失うことが差し迫っている」。pn's'k は初出の語であるが、*apa-nas- 「滅する、無くなる」から派生した名詞であり³⁰⁾、原文の「失」に對應すると考えた。ただし、その原文の「得失」とは順序が逆になるうえに、原文には pcp'n 「(形容詞) ~差し迫っている」に對應する語が見当たらない。しかも「得」に對應するはずの語は完全に破損している。不確定要素が多すぎて、筆者の復元は單なる推定の域を出るものではない。

verso 4: (L') wyšt wnty 「亂すことができない(?)」。wyšt wnty は可能法のように見える。意味と文脈から wyš の現在語幹には wyc が期待される。しかし wyc の過去語幹は *wyc'(t)ないしは *wyyt となるはずであり、wyšt になり得ない。佛教ソグド語には "wyšt'k 「混亂した、亂れた」という語があり、キリスト教ソグド語の "wyž 「混亂させる」の過去分詞と考えられている [Sims-Williams 1985, 73, 149]。ここではその同じ動詞の preverb がない形式と考える³¹⁾。

verso 7: (c)xšt'w'k 「欲しがること」。上記参照。

5 おわりに：残された問題など

中國や東トルキスタンに移住したソグド人は、唐代にはいると移住地の佛教信仰を組織的に取り入れるとともに、ソグド人僧侶の手によってソグド語譯された佛典も作り始めた。その際、通常の大乗佛典だけでなく、當時中國で流行していた禪宗文獻の翻譯も行っていたことが明らかになった。ベルリンのコレクションには未比定の佛典が多いが、今後は禪宗文獻も視野にいれながら研究を進めていく必要がある³²⁾。

30) 實際に在證される他動詞 (あるいは使役形) pn'yš (< *apa-nāsaya-) 「失う」を参照せよ。自動詞形は *pnš- (< *apa-nasya-) が期待される。pn's'k は、期待される名詞形 *apa-nāsa にさらに aka 語尾がついた形になっている。

31) キリスト教文獻には、動詞 wyc の名詞形 wyc の複數形 wyšt が知られているので [Sims-Williams 1985, 231]、ここでも「動きをなさない」と解釋出來そうだが、その場合には、語順として *wyšt L' wnty が期待される。

32) 筆者はトルファン文書の中に『梵網經』のソグド語譯を發見したが [Yoshida 2015, 173, no. 31]、『梵網經』と『心王經』との密接な関係を考えれば、それもまた禪宗と關連する可能性がある。筆者自身は、ベルリンの斷片の中には禪宗關係のソ

それにしても、どれほどのソグド人がこの時代の中國に在住し、どれほどが佛教を信仰し、どれほどのソグド語佛典を翻譯・書寫していたのか、ソグド人の民族宗教である祆教との関係はどうであったのか³³⁾、10世紀のソグド語佛典に見られるウイグル語の要素はどのように考えられるのかなど、疑問は盡きない。漢文史料を扱う研究者との共同研究によって、中國のソグド人の全體像を把握する必要がある。實際ソグド人佛教徒に関する東洋史研究者による研究も發表されている〔中田 2014, 中田 2016〕。

ソグド語圏の佛教信仰に関しては、セミレチエの佛教寺院遺跡についても研究が必要である。ここでは唐の時代、碎葉鎮（現アク・ベシム遺跡）に建てられた大雲寺以外に、土着のソグド人のものと思われる佛寺の遺跡も見つかっている³⁴⁾。玄奘は報告しないから、明らかに玄奘以降に成立したものであるが、そこでのソグド人の佛教信仰も興味深い問題である〔吉田 印刷中〕。

略號

『大正』 = 『大正新修大藏經』

DMSB = N. Sims-Williams and D. Durkin-Meisterernst, *Dictionary of Manichaean Sogdian and Bactrian*, Turnhout 2012

参考文献

- 赤木崇敏「ソグド人と敦煌」森部豊（編）『ソグド人と東ユーラシアの文化交渉』東京 2014, pp. 119-139.
- 荒川正晴『ユーラシアの交通・交易と唐帝國』名古屋 2010.
- 伊吹敦『「心王經」の諸本について』『印度學佛教學研究』52/1, 2003, pp. 180-187.
- 伊吹敦「「禪」の起源」『駒澤大學大学院 佛教學研究會年報』38, 2005, pp. 1-21.
- 沖本克己『『楞伽師資記』の研究：藏漢テキストの校訂および藏文和譯（1）』『花園大學研究紀要』9, 1978, pp. 59-87.
- 影山悦子「出土資料からみたソグドとセミレチエの佛教」池田知久（編）『論集「原典」』「古典學の再構築」研究成果報告集 II, 2003, pp. 239-244.

グド語佛典は少なくないという印象を持っている。

- 33) P 8 の奥書には m'x'dy'h 「月神の女奴隸」、nnyprn 「ナナ女神の榮光」のような、明らかにゾロアスター教信仰を前提にした人名も見つかる。ソグド語佛典ではインドラが居住する天を rxwšn'yrōmnwh と呼ぶが、これはゾロアスター教の天國を表す語である。
- 34) ソグディアナの佛教遺跡については加藤 1997 及び影山 2003 を参照せよ。セミレチエの遺跡については、近年山内和也（現帝京大學教授）のチームが發掘を行っておりその成果も期待される。なお最近の成果は以下の報告書で見ることができる：獨立行政法人國立文化財機構 東京文化財研究所 文化遺産國際協力センター（編）『キルギス共和國チュール川流域の文化遺産の保護と研究 アク・ベシム遺跡、ケン・ブルン遺跡——2011~2014 年度——』東京 2016。

- 加藤九祚『中央アジア北部の佛教遺跡の研究』（シルクロード學研究 vol. 4）1997.
- 桑山正進（編）『慧超往五天竺國傳研究』京都 reprint 1998.
- 關尾史郎『西域文書からみた中國史』東京 1998.
- 中田美繪「唐代中國におけるソグド人と佛教」森部豊（編）『ソグド人と東ユーラシアの文化交渉』東京 2014, pp. 46-60.
- 森安孝夫「唐代における胡と佛教的世界地理」『東洋史研究』66/3, 2007, pp. 1-33.
- 森安孝夫『シルクロードと唐帝國』東京 2007a.
- 森部豊『ソグド人の東方活動と東ユーラシア世界の歴史的展開』吹田 2010.
- 柳田聖山『禪の語録 2 初期の禪史 I』京都 1971.
- 柳田聖山『禪佛教の研究』京都 1999.
- 柳田聖山『初期禪宗史書の研究』京都 2000.
- 吉田豊「ソグド語の『究竟大慈經』について」『アジア・アフリカ言語文化研究』第 27 號, 1984, pp. 76-94.
- 吉田豊「大谷探検隊將來中世イラン語文書管見」『オリエント』28/2, 1985, pp. 50-65.
- 吉田豊「ソグド文字で表記された漢字音」『東方學報 京都』1994, pp. 380-271.
- 吉田豊「Sino-Iranica」『西南アジア研究』No. 48, 1998, pp. 33-51.
- 吉田豊「出土資料が語る宗教文化——イラン語圏の佛教を中心に」『新アジア佛教史 05 中央アジア 文明・文化の交差点』東京 2010, pp. 165-215, 429-436.
- 吉田豊「漢語佛典と中央アジアの諸言語・文字——中世イラン語、特にソグド語佛典の場合」新川登龜男（編）『佛教文明の轉回と表現 文字・言語・造形と思想』東京 2015, pp. 24-51.
- 吉田豊「中國、トルファンおよびソグディアナのソグド人景教徒——大谷探検隊將來西域資料 2497 が提起する問題——」（印刷中）。

中文

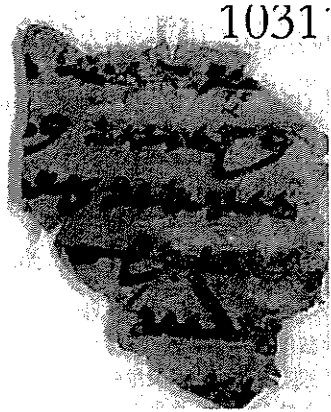
- 吉田豊「粟特文考釋」吐魯番地區文物局（編）『吐魯番新出摩尼教文獻研究』北京 2000, pp. 3-199.
- 羅豐・榮新江「北周西國胡人翟曹明墓誌及墓葬遺物」榮新江・羅豐（編）『粟特人在中國』北京 2016, pp. 269-299.
- 毛陽光「唐代洛陽粟特裔居民的佛教信仰」榮新江・羅豐（編）『粟特人在中國』北京 2016, pp. 314-320.
- 榮新江『中古中國與外來文明』北京 2001.
- 榮新江「唐代禪宗的西流傳」『田中良昭博士古稀紀年論集・禪學研究の諸相』東京 2003, pp. 59-68.
- 中田美繪「唐代譯經僧的活動和中亞地區」榮新江・羅豐（編）『粟特人在中國』北京 2016, pp. 337-349.

歐文

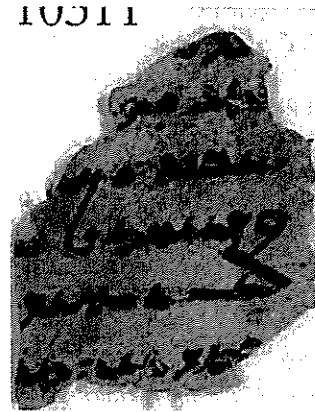
- S. Beal, *The life of Hiuen-Tsiang*, reprint London 1914.
- E. Benveniste, "Notes sur la fragment sogdien *Buddhadhyāna-samādhisāgarasūtra*, avec la collaboration de P. Demiéville", *JA* 223, 1933, pp. 193-245.
- V. Hansen, "New work on the Sogdians, the most important traders on the Silk Road, A.D.

500-1000", *T'oung Pao* 89, 2003, pp. 149-161.

- E. de la Vaissière, "Notes sur la chronologie du voyage de Xuanzang", *JA* 298/1, 2010, pp. 157-167.
- P. B. Lurje, *Personal names in Sogdian texts*, (R. Schmitt, et al. (eds.), *Iranisches Personennamenbuch*, Band II, Faszikel 8), Vienna, 2010.
- D. N. MacKenzie, *The Buddhist Sogdian texts of the British Library*, Acta Iranica 10, Leiden/Tehran 1976.
- N. Sims-Williams, *The Christian Sogdian manuscript C2*, Berliner Turfantexte 12, Berlin, 1985.
- N. Sims-Williams, *Bactrian documents II*, London 2007.
- W. Sundermann, "A fragment of the Buddhist Kāñcanasāra legend in Sogdian and its manuscripts", in: A. Panaino and A. Piras (eds.), *Proceedings of the 5th conference of the Societas Iranologica Europaea*, vol. 1, Milan 2006, pp. 715-724.
- Y. Yoshida, "The Sogdian Dhuta text and its Chinese original", *Bulletin of the Asian Institute* 10, 1996 [1998], pp. 167-173.
- Y. Yoshida, "Buddhist literature in Sogdian", in: R. E. Emmerick and M. Macuch (eds.), *The literature of Pre-Islamic Iran. Companion volume I to A history of Persian literature*, New York 2009, pp. 288-329.
- Y. Yoshida, "Buddhist texts produced by the Sogdians in China". In: M. Maggi et al. (eds.), *Buddhism among the Iranian peoples of Central Asia*, Vienna, 2013, pp. 155-179.
- Y. Yoshida, "When did Sogdians begin to write vertically?", in: *Tokyo University Linguistic Papers* 31, *Festschrift for Professor Hiroshi Kumamoto*, 2013a, pp. 375-394.
- Y. Yoshida, "A handlist of Buddhist Sogdian texts", 『京都大學文學部研究紀要』54, 2015, pp. 167-180.

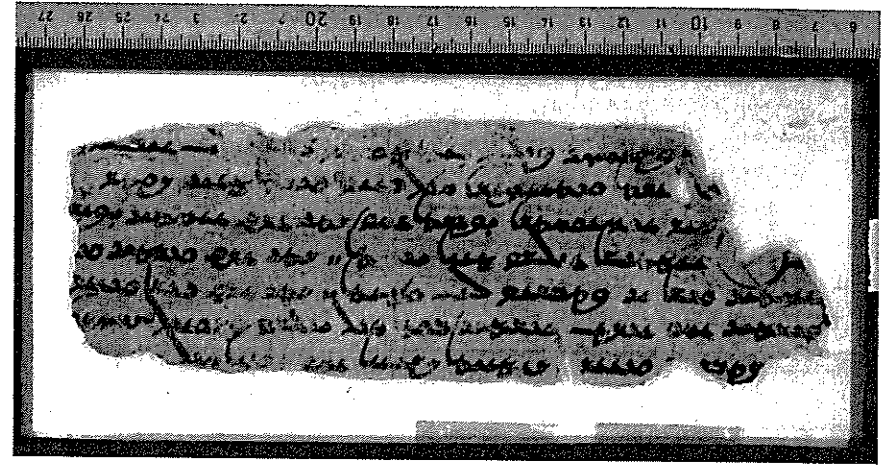


So 10311 recto

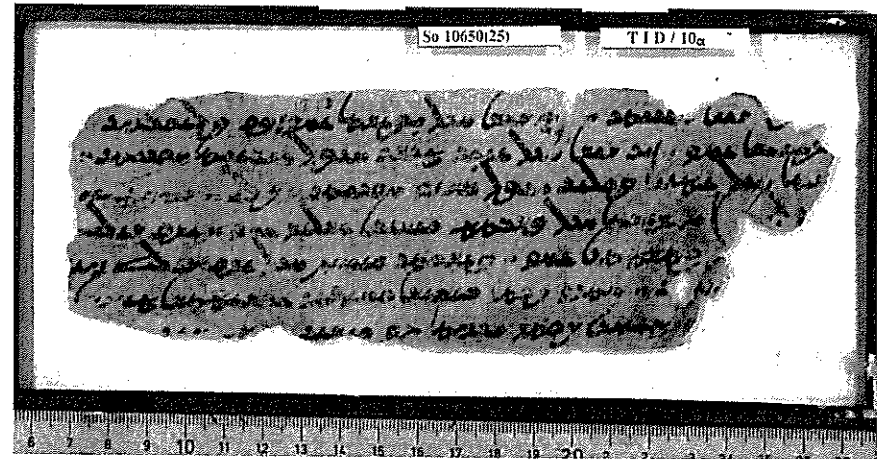


So 10311 verso

Depositem der BERLIN-BRANDENBURGISCHEN AKADEMIE DER WISSENSCHAFTEN in
der STAATSBIBLIOTHEK ZU BERLIN— Preussischer Kulturbesitz Orientabteilung



So 10650 (25) recto



So 10650 (25) verso

Depositem der BERLIN-BRANDENBURGISCHEN AKADEMIE DER WISSENSCHAFTEN in
der STAATSBIBLIOTHEK ZU BERLIN— Preussischer Kulturbesitz Orientabteilung

西夏金元」講談社

妹尾 達彦二〇〇一「長安の都市計畫」講談社

高橋 學而一九九七「遼南京（燕京）折津府の平面プランについて」『古文化談叢』第三七集

高橋 學而二〇一三「遼中京大定府の成立―管轄下の州縣域から」契丹「遼」と10〜12世紀の東部ユーラシア」勉誠出版

高橋學而・武田和哉二〇〇六『草原の王朝・契丹國（遼朝）の遺跡と文物』勉誠出版

武田 和哉二〇〇五「契丹國（遼朝）における宮都の基礎的考察」『條里制・古代都市研究』第二一號

林俊雄・森安孝夫一九九九「カラハバルガスン宮城と都市遺址」森安孝夫・オチル『モンゴル國現存遺蹟・碑文調査研究報告』中央ユーラシア學會

布野 修司二〇一五『大元都市』京都大學學術出版會

包 慕 萍二〇一三「十三世紀における中國大陸における都城構造の轉換」國立歷史民俗博物館『アジアから見る日本都市史』山川出版

鄧 小 南二〇〇五「論五代宋初「胡／漢」語境的消解」『文史哲』二〇〇五年第五期

傅 樂 煥一九八四『遼史叢考』中華書局

葛 兆 光二〇〇四「宋代中國意識の凸現―關於近世民族主義思想的「一個遠源」」『文史哲』二〇〇四年第一期

侯仁之 吳良鏞一九七七「天安門廣場禮贊」『文物』一九七七年

第九期

遼中京發掘委員會一九六一「遼中京城址發掘的重要收穫」『文物』一九六一年第九期

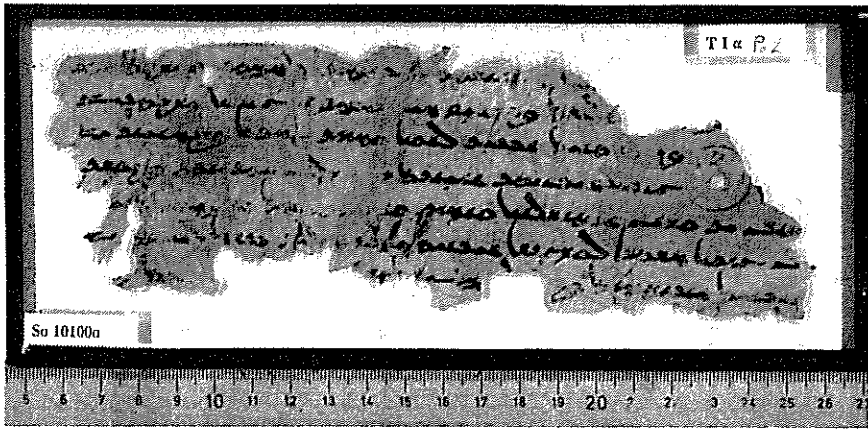
李 逸 友一九八七「遼代城郭營建制度初探」『遼金史論集』第三輯

田 廣 林二〇〇一「遼朝上京的營建及其畫時代意義」『中國古都研究』第一八輯上冊、國際華文出版社

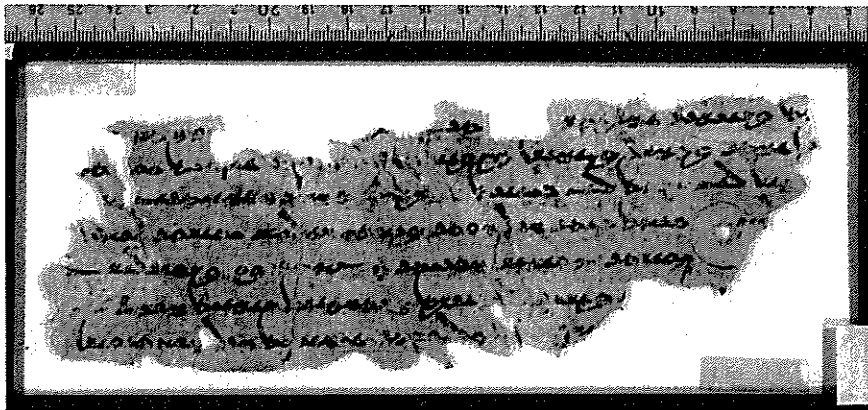
榮 新 江二〇〇九『清明上河圖』爲何千漢一胡』『隋唐長安：性別、記憶及其他』三聯書店（香港）

ファム ヴァン チェウ 桃木至朗譯二〇一二「李朝期（一〇〇一―一〇三二）のタンロン禁城とA區（禁城西側）の各建築遺跡の價值」代表研究者清水眞一『タンロン皇城遺跡の保存活用に関する包括的調査研究』平成二一―二三年度科學研究費補助金 研究成果報告書

（附記）本稿作成に際しては高井康典氏から考古資料を御提供いただいた。ここに深謝したい。また、本稿は平成二八年度日本學術振興會科學研究費補助金（基盤研究（C））による研究成果の一部である。



So 10100a recto



So 10100a verso

ソグド語譯「楞伽師資記」と關連する問題について（吉田）

TÔHÔGAKU

(Eastern Studies)

Edited by
The Institute of Eastern Culture
No. 133 January 2017

(Contents)

Articles:	Page
The birth of historical chronicles in Sri Lanka, BABA Norihisa	1
The construction and spatial structure of Chung-ching (Ta-ting-fu) of the Liao: The possibilities of the history of East Asian capital cities in the 11th to 13th centuries, KUBOTA Kazuo	15
On the Sogdian version of the <i>Leng-ch'ieh shih-tzu-chi</i> and related problems, YOSHIDA Yutaka	52
An examination of the materials used for reconstructing the T'ang statutes: With a focus on the <i>Ta-T'ang K'ai-yüan li</i> , CHAO Ching (trans. TSUJI Masahiro)	53
Notes on Eastern studies at home and abroad:	
A new generation in the study of classical Chinese literature: With a focus on Sung literature, UCHIYAMA Seiya	69
"The Written Legacy of Dunhuang": The International Scholarly Conference Devoted to the Memory of L. N. Menshikov (1926-2005) and L. I. Chuguevsky (1926-2000), TAKATA Tokio	79
Announcement of the 35th Tôhō Gakkai Award (2016)	88
Summaries of lectures and research reports delivered at the Tôhō Gakkai's 2016 Autumn Meeting	92
The late Prof. MARUYAMA Noboru (1936-2006): Reminiscences by TAKEDA Akira, SAJI Toshihiko, OZAKI Fumiaki, FUJII Shōzō, NAGAHORI Yūzō and OIKAWA Junko	96
In memoriam His Imperial Highness Prince MIKASA Takahito, NAKANE Chie, IKEDA Yutaka, IMOTO Eiichi (repr.) and TAKASAKI Jikidō (repr.)	137
In memoriam Prof. Dr. TOKUNAGA Muneo, AKAMATSU Akihiko and YOKOCHI Yūko	146

The Tôhō Gakkai: 4-1, Nishi-Kanda 2-chome, Chiyoda-ku, Tokyo

On the Sogdian Version of the *Leng-ch'ieh Shih-tzu-chi* and Related Problems

YOSHIDA Yutaka

In this article, three Buddhist Sogdian fragments from the German Turfan collection are edited and identified with the Chinese original. They are So 10100a, So 10650 (25), and So 10311, the last two being joinable. It is noteworthy that the identified text has turned out to be one of the earliest Ch'an 禪 texts, entitled *Leng-ch'ieh shih-tzu-chi* 楞伽師資記, which was produced by Ching-chüeh 淨覺 in the early eighth century. Together with the hitherto identified Sogdian translations of such apocryphal texts as the *Fa-wang ching* 法王經, *Hsin-wang ching* 心王經, and *Chiu-ching ta-pei ching* 究竟大悲經, which are often cited in Chinese Ch'an literature, this discovery makes it certain that Sogdians resident in China were familiar not only with ordinary Mahāyāna sūtras but also with Ch'an Buddhism. The newly identified text attests a few new words, such as *rnk*, translating *jan* 染 'stain', *cxšt'w'k* 'desirousness', and *pn's'k* corresponding to *shih* 失 'loss'. Difficult is *L' wyšt wnty*, rendering *pu tung* 不動 'not move, immovable'; *wyšt* seems to be the past stem of **wyž*, of which the cognate is Chr. "wyž 'to agitate'.

Apart from the edition of the fragments, the history of Buddhism among Sogdians is also briefly surveyed. Referring to the attestation of names of Buddhist Sogdians such as (Ts'ao) Fu-ti-yen (曹) 伏帝延 (Middle Chinese **b'ieü tiei iän*), transcribing Butiyān (lit. 'Buddha's favour'), among Turfan and Tun-huang 敦煌 Chinese documents of the seventh to eighth centuries, the author argues that the mass conversion of Sogdians to Buddhism seems to have begun in the first half of the seventh century. This pro-Buddhist atmosphere among Sogdian traders of the seventh century was noted by Hsüan-tsang 玄奘 when he gave lectures to them in Liang-chou 涼州 just before he left China in 629 C.E.

The Birth of Historical Chronicles in Sri Lanka

BABA Norihisa

Through a redaction criticism of the *Dīpavaṃsa*, Sri Lanka's first historical

chronicle, this article elucidates its structure, the editorial work undertaken by its compiler(s), and its stance towards the contemporary situation. The findings may be summarized chronologically in the following manner.

The Mahāvihāra school, which had advanced into mainland India by the third century at the latest and styled itself "Therīya," compiled the *Dīpavaṃsa* around the fourth century. Its compiler(s) reversed the relationship between India, which had been the centre of Buddhism, and Sri Lanka, which lay on its periphery, by positioning the Mahāvihāra order as the orthodoxy of the Buddhist world on three counts, namely, the Buddha (sacred site), the Dharma (the Buddha's teachings authorized by councils), and patrons (kingship). That is to say, the compiler(s) brought together source materials relating to Indian Buddhism in the form of a history according to which the Buddhist teachings gathered together by the elders (Theravāda) were passed down through the generations to Mahinda; they brought together source materials relating to Sri Lankan kingship in the form of a history centred on King Devānampiya Tissa as a descendant of the Śākya (Sakka) tribe and eventually King Mahāsammata, the first king of human beings; and they brought together source materials relating to Sri Lankan Buddhism with a focus on the Mahāvihāra monastery as a sacred site. The compiler(s) then created the structure of the *Dīpavaṃsa* in which these three elements came together in the scene of the establishment of the Mahāvihāra by King Devāsampiya Tissa for Mahinda's order. The *Dīpavaṃsa*, having been composed in this manner, then sparked the compilation of the *Mahāvamsa* in the fifth century and subsequent historical chronicles, and thus gave birth to the genre of such chronicles (*vamsa*) in Sri Lanka.

The Construction and Spatial Structure of Chung-ching (Ta-ting-fu) of the Liao: The Possibilities of the History of East Asian Capital Cities in the 11th to 13th Centuries

KUBOTA Kazuo

In this article, I first point out that in the Liao's "Central Capital" Chung-ching 中京 (Ta-ting-fu 大定府) the outer city had an axial road with galleries (*lang-she* 廊舍) on both sides and that this type of architecture in a capital city resembled that of K'ai-feng 開封 of the Northern Sung. But whereas in K'ai-feng the galleries (*yü-lang* 御廊, "imperial galleries") were along the axial road, or imperial way (*yü-chieh* 御街), of the inner city, in Chung-ching they were